

発掘調査の概要

藤原宮朝堂院朝庭の調査(飛鳥藤原第179次)

2013年4月8日に開始した藤原宮朝堂院朝庭の発掘調査は、途中約3カ月半の中断を挟んで、2014年2月5日までおこなわれました。中断前の状況は50号に書かれていますので、本号では、9月半ばの調査再開後の成果を紹介したいと思います。

再開後は、調査区全域で検出していた礫敷の一部を除去し、下層の状況を調査しました。その結果、東西方向に延びる柱列や、大小複数の沼状遺構等が見つかりました。

東西柱列は約3m(10尺)間隔で、19基の柱穴を確認しました。長さは54m以上におよび、更に調査区の東に延びる可能性があります。柱穴は直径30cm前後の不整形円形をしており、埋土に礫を含んでいることから、礫敷上から掘り込んだと考えられます。また、柱穴直上の礫敷面は、周囲よりわずかに盛り上がっていました。

沼状遺構は、これまで大きな一つの遺構であると考えていましたが、今回の調査で、大小複数の沼状遺構が隣接して存在していることがあきらかとなりました。いずれの沼状遺構も、埋土には木屑が含まれ、岸付近に瓦が多量に捨てられている場所もありました。木屑や瓦は、藤原宮の造営にともなって廃棄されたものと考えられます。

以上のように、今回の調査では、朝庭の空間利用や藤原宮の造営過程を考える上で、貴重な手がかりを得ることができました。東西柱列は、仮設の塀あるいは儀式にともなう施設等の可能性があります。沼状遺構の性格等とともに、周辺の調査成果をふまえながら、検討を深めていきたいと思えます。

(都城発掘調査部 桑田 訓也)



調査区全景(南東から、右奥は耳成山)